

祝！同窓生が初の母校医学科教授に就任

琉球大学大学院医学研究科麻醉科学講座 教授に就任して

琉球大学大学院医学研究科麻醉科学講座 教授 垣 花 学（5期生）



琉球大学医学部医学科同窓会の皆様、日頃より大変お世話になっております。私は、琉球大学医学部医学科5期生の垣花学です。この度、平成26年5月1日付で琉球大学大学院医学研究科麻醉科学講座 教授に就任いたしました。同窓会の蔵下会長のはからいで、同窓会誌「南風」

で皆様へのご挨拶の機会を頂きました。これまでの同窓会誌に目を通していると、「琉球大学医学部医学科卒業生から母校の教授を輩出することが、医学科同窓会の悲願」ということがひしひしと伝わってきておりましたので、今回の教授選考期間は多少なりとも重圧を感じておりました。今回の決定について、ホッとしているところです。医学部医学科卒業後、ここに載せることができないほど多くの方々にご指導頂き、また事あるごとに激励を頂きましたこと、この場を借りて御礼申し上げます。

私は、平成3年（1991年）3月に琉球医学部学科を卒業し、麻醉科に入局と同時に大学院へ進学しました。大学院卒業後、縁があり1996年にカリフォルニア大学サンディエゴ校麻醉科へ留学し、私のライフワークとなった虚血性脊髄障害の研究と出会いました。1998年から2年間は沖縄県立宮古病院に勤務しましたが、そこで離島医療における麻醉科医の役割の重要性や1症例を大切に考察する症例報告の重要性を認識しました。2000年から再び琉球大学附属病院麻醉科に戻り、第2代琉球大学麻醉科学講座教授

須加原一博先生（現：琉球大学副学長・理事）のもと臨床、研究そして教育に従事してきました。さらに、2009年にはハーバード大学医学部の関連病院であるマサチューセッツ総合病院麻醉科にVisiting Scientistとして再び研究留学させて頂き、ハーバード大学麻醉科と琉球大学麻醉科の連携を構築しました。これら一連のことは、一般病院の勤務医として経験することは難しいと思われますが、琉球大学に籍を置くことで得ることができた貴重な経験として、現在の私の礎になっております。

琉球大学医学部麻醉科は初代教授 奥田佳朗先生、第2代教授 須加原一博先生の両教授が約30年にわたり育て上げた教室です。私が聞いたところによると開講当初は教授、助教授を含めてたった6名の麻醉科医で手術麻醉を運営していたようです。現在では、13名の麻醉専門医、7名の麻醉標榜医、3名の後期研修医が手術室、集中治療室そして麻醉科外来を運営しています。また、およそ20年来交流しているカリフォルニア大学サンディエゴ校（UCSD）へ1名の医局員を留学させており、脊髄への神経細胞移植の研究に従事しております。ご存じのとおり、医療技術の進歩により低侵襲手術が趨勢となったため、高リスク因子を複数もつ患者でも手術をうけることができるようになりました。また病院経営上、手術症例数は増加し続けており、それをこなすために夜

中まで麻醉管理を行うことも稀ではありません。そのため、麻醉科医の精神的・肉体的負担も徐々に大きくなっており、麻醉科長となった私の立場では病院経営を考えながら、医局員の負担の軽減策も考慮していかなければならないとも思っております。

昨今、国公立大学・大学院にはその存在意義の再確認として、「そのミッションは？」ということが問われています。特に地方大学では、その存在意義を明確にし、大学改革を推進することが求められています。琉球大学医学部に関しては、教育・研究ならびに附属病院における臨床がその存在意義を示すキーワードになり、琉球大学の麻醉科学講座もこのキーワードでの存在意義を示さなければならない状況です。現在、基礎医学講座・臨床講座には新進気鋭の教授が続々と就任しています。そのおかげで琉球大学医学部は改革に取り組み、その特有の教育、発展性のある臨床・研究を立ち上げており、私もそれに遅れないように必死になっているところです。これらの成果は徐々に表れており、例えば先の医師国家試験の合格率の回復は、教務委員会、教育企画室などの活動の成果だと思います。麻醉科学講座は、分子生理学講座、薬理学講座、細菌学講座、脳神経外科学講座そして第二内科とともに「ガスバイオロジー」をテーマに共同研究を開始しており、全国にも類を見ない独創的な研究を行っているところです。これらの研究テーマを中心に、大学院生とともに着実に、かつインパクトのある研究成果を出していきたいと思っています。

臨床講座の長（教授）は、臨床・研究についてその専門性を有し（全国レベルで認められる程度）、時代が求める多様な変化を見極め講座の運営を円滑に行うことが求められます。これは、最高学府としての「人を育てる」という使命を成し遂げるに必要な要素であると思います。大学における臨床・研究には、これまでの多くの同窓生（10期生まででしょうか？）が経験しているように、生命科学や医科学への理解、医療への貢献のみならず医療行為に不可欠な洞察力・思考力・問題解決力を構築するポテンシャルがあります。しかしながら、初期臨床研修制度の開始以降に大学での教育・研究を行う卒業生（同窓生）が非常に少なくなっており、今後琉球大学医学部医学科の教授に就任できる同窓生がはたして増えてくるのか（？）と不安にも思っています。今後、わが母校の発展を考えるのであれば、次から次へと同窓生の教授の誕生が必要です。同窓会会員の皆様にも、このことを再認識していただき、少しでも多くの医学生や初期研修医に琉球大学医学部での教育・研究への従事を薦めていただけるようお願い申し上げます。同窓生のひとりとして、同窓生の皆様と一緒に仕事ができることを楽しみにしています。

今後とも、琉球大学医学部医学科ならびに麻醉科学講座の発展に、ご助言・ご指導をお願いいたします。